

宮沢賢治の「理想」について

——「デクノボー」とグスコープドリ・ゴーシュ——

竜 口 佐知子

はじめに —— 「雨ニモマケズ」について

「雨ニモマケズ」という題名で一般によく知られる文章は、宮沢賢治の死後間もなく、遺品のトランクから発見された手帳に記されたメモである。このトランクは、昭和六年秋の最後の上京の際に、賢治が携行していたものであり、手帳は、東京で発熱・病臥した際に書いたと思われる家族宛の遺書二通とともに、蓋裏のポケットに入っていた。メモに記された日付などから、花巻への帰郷後、自宅で病床にあつた昭和六年十月から年末もしくは翌年初めごろの時期に使用されたものと推定される。^(注1)「雨ニモマケズ」のメモには「113」の日付が付されており、昭和六年十一月三日に記されたものと考えられる。^(注2)

「雨ニモマケズ」は、賢治の書いた文章としてはもともと有名なものの一つであるといえるが、その評価は未だに定まっていない。昭和三十八年頃に起こった、谷川徹三と中村稔による、いわゆる「雨ニモマケズ論争」では、このメモを「明治以来の日本人の作つたあらゆる詩の中で、最高の詩」「賢者の文学としての賢治の文学の特色を、最も純粹に最も高い精神で打ち出したもの」と称揚する谷川と、

「宮沢賢治のあらゆる著作の中でもっとも、とるにたならぬ作品のひとつであろう」「雨ニモマケズ」は羅須地人協会からの全面的退却であり、「農民芸術概論」の理想主義の完全な敗北である。そしてこの作品は賢治がふと書きおとした過失のように思われる^(注4)と述べる中村とで意見が対立したが、両者の議論は発展を見せずに終わった。しかし、この論争を基点として、その後、多くの論者により、様々な立場からの論考が発表されている。^(注5)

手帳に記されたメモの一部という性格から、これを「詩」あるいは「作品」として扱うかどうか、という問題に始まり、論点は多岐に渡る。中でも、死に至る病の床で記されたものという点、また、手帳の中の記述に法華経信仰に基づく内容が多い点から、賢治の人生および信仰に結びつけて論じるものが多数を占めるのは、当然ともいえるであろう。さらに、多くの論考に共通するのが、このメモを、晩年の賢治が描いた「理想の人間像」と捉えることである。

このことは、一般的な「雨ニモマケズ」理解とも繋がっている。特に、戦後の国語教育において、教材としての「雨ニモマケズ」は、長きに渡って宮沢賢治の人生と重ねて提示されてきた。

構大樹は、戦時下での「雨ニモマケズ」の普及を起点に、戦後

の学校教材への賢治作品の採用の流れについて詳細に検証し、国語教育の場において、「雨ニモマケズ」によって意義づけられた宮沢賢治イメージが根強く保持され、そのことが一般的な賢治受容と強く結びついていることを論じている。また、中地文は、昭和二十年代の中学校の国語教科書での賢治関係の教材について「全体を見渡したときに印象に残るのは、詩「雨ニモマケズ」を通して偉人賢治を描き、それを模範として提示しようという傾向が強いことである」[この時期の中学校教科書は、賢治を高い「精神」(谷川、草野)をもって農民のために尽くした偉人として描き、それを手本に生きてゆくよう働きかける方向性をもっていた]と指摘する。葛西まり子は、賢治を題材とした伝記教材の中で、賢治の「ありうべかりし自伝」とも呼ばれる「グスコープドリの伝記」と「雨ニモマケズ」が結びつけて引用されることについて「昭和六〇年頃までの宮沢賢治の伝記教材は、「グスコープドリの伝記」や「雨ニモマケズ」を自己犠牲という文脈において引用しつつ、賢治を紹介していた。それらを通じ、賢治は自己犠牲の精神を持った人というイメージで教えられてきたのである」と述べている。

さらに、日本国内で普及している、年少者向けの「雨ニモマケズ」の英語版では、末尾の「サイウフモノニワタシハナリタイ」という一文の「サイウフ」モノ」という語に対して「person」という訳語が用いられており、それが「人間」であることが明確になっている。平成二十年に出版された岩波ジュニア文庫のロジャー・パルバース訳では「That is the sort of person I want to be」となっており、「ここであたわれているのは、賢治がなりたいたいと考える、賢治の理想の人物です」という解説がついている。平成二十五年出版の絵

本「雨ニモマケズ Rain Wont」のアーサー・ビナードによる英訳では「All this is my goal - the person I want to become」である。また、子ども向け英語教材を扱う株式会社 mji が YouTube 上に公開している「雨ニモマケズ」の英語版の朗読動画でも、「This is the person I want to be」と訳されている。この動画は、東日本大震災を契機に公開され、「東北地方出身の宮沢賢治が書いた「雨ニモマケズ」／この詩を通して、東北人の持つ心の温かさ、芯の強さを世界中の人に届けられたらと願っています」と、このメモを、賢治を含めた東北地方の人々の人間性を表すものとする解説がなされている。このように、このメモで描かれた、いわゆる「デクノボー」像は、「このように生きた宮沢賢治の人物像」、もしくは「宮沢賢治がこのように生きようとした人間像」とあるというイメージで流布されてきた状況がある。

しかし、この「デクノボー」像を「人間像」、すなわち「人間としての理想像」と限定して考えてよいかどうかという点には疑問が残る。このメモに描かれた「デクノボー」像が、作者の「ナリタイモノ」とあるということは、末尾の「サイウフモノニワタシハナリタイ」という一文から順当に導かれることである。一方、多くの論者も指摘するように、このメモの内容は、およそ「人間」には実現不可能と思われるものである。

もちろん、「理想」という言葉には、実現不可能なものも含まれる。しかし、このメモの中に、「サイウフモノ」を「人間」だと確定させるような記述がないのも確かである。むしろ「人間離れ」した特徴を持つ「サイウフモノ」とは、文字通り「人ならざるモノ」と考えるべきではないのか。つまり、ここに書かれている「デクノ

ボー」像とは、「人間である（私）」にはなりえないモノ」としての「理想」像なのである。「人間」としての「理想」であることと、「人間ではないモノ」としての「ナリタイモノ」¹¹「理想」であることとの間には、明確な差異がある。その点を見逃すべきではないと考える。

元々は私的なメモであるにもかかわらず、教科書等を通して人口に膾炙したことによって、「雨ニモマケズ」及びそこに描かれた「デクノボー」像は、賢治の個人的な願望というだけでなく、人々が共有するべき「理想」であるという一般的イメージを持つこととなったといえる。そして、そのことには、「デクノボー」を「理想の人間像」と考える、という前提が大きく関わっている。しかし、それは、このメモを記した賢治にとつての「理想」の内実とは乖離しているのではないか。賢治自身の「理想」としての「デクノボー」像を明らかにするためには、今一度本文に立ち戻り、その前提から検討を加える必要がある。

「雨ニモマケズ」の本文から、「デクノボー」像を読み解いていくと、そこには、周囲との〈関係〉の問題が浮かび上がってくる。それは、「デクノボー」としてのあり方に、大きな意味を持つものである。そして、この〈関係〉の問題は、賢治の複数の童話作品においても、重要なテーマとして表れているのである。

本稿では、あらためて「雨ニモマケズ」の本文を読み解き、そこに描かれた「デクノボー」像のありようを再検討したい。その上で、「デクノボー」像と結びつけて語られることの多い賢治童話の主人公たちの中から、「雨ニモマケズ」が書かれた時期と近い晩年の童話である「グスコープドリの伝記」のグスコープドリと「セロ弾

きのゴーシュ」のゴーシュを取り上げ、〈関係〉の問題をめぐるそれぞれの照応関係について考察する。そのことによって、宮沢賢治の「理想」について再考を試みたい。

一、「デクノボー」

「雨ニモマケズ」

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラッテ歩ル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ヅキノ小屋ニヅテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒドリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

「〔雨ニモマケズ〕」メモは、末尾で「サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」と記される、その「サウイフモノ」とはどのようなものか、ということが書かれた文章である。その内容は、「サウイフモノ」の性質、行動、そして周囲からの評価の順に述べられている。以下、「サウイフモノ」を、便宜的に「デクノボー」と呼ぶこととする。

最初に描かれる「デクノボー」の性質は、雨、風、雪、暑さといった自然現象に「負ケ」ない「丈夫ナカラダ」を持っている、ということである。冒頭の「雨ニモマケズ／風ニモマケズ」という有名なフレーズは、一般的には「風雨に遭っても挫けない精神的な強さ」と受け取られることも多いが、実際には、あくまでも「カラダ」、すなわち身体的な強さを指している。次に、内面的な性質として、「慾」

や「瞋」りを持たないことが描かれる。さらに、「ジブンヲカンジャウニ入レズニ」、つまり、自分の立場を考慮せずに、あらゆる物事を理解し記憶するという性質を持つとされる。

これらの性質は、それぞれが容易には持ち得ないものであるといえるが、どのようにしてそれを得るかは、ここには書かれていない。「デクノボー」の具体的な生活の様子としては、食事の内容が描かれているのみである。「玄米四合」と「味噌」、「少シノ野菜」というその内容は、ほぼ「玄米」のみをエネルギー源とする、必要最小限の栄養であるといえる。また、動物性の食物を食べないという点も注目される。よく指摘されるように、これは、「丈夫ナカラダ」を維持するためには、とても充分なものとはいえないであろう。

そうであるとすれば、「丈夫ナカラダ」とは、努力によって得たり、維持したりしているものではなく、「デクノボー」が所与のものとして持ち、損なわれることがないものであると考えられる。同様に、内面的な性質についても、「慾」や「瞋」りは、抑制しているのではなく、もともと「ナイ」ものとして描かれているのである。「イツモシヅカニワラツテクル」のであれば、その「ワラ」いは、「喜」や「楽」の感情から来ているものではない。これは、常に感情が一定であることを表しているものといえる。

また、「アラユルコトヲ」「ヨクミキシワカリ」という記述からは、他人から教わる、という意味合いは読み取れない。「アラユル」物事から自然に学び、覚える性質を、「デクノボー」がもともと持っていることが描かれているのである。このような、およそ「人間」離れた身体的、内面的性質を、所与のものとして持つことが、「デクノボー」の特徴である。

次に、「デクノボー」の行動の面について描かれる。「デクノボー」が普段「居る」場所は、「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ／小サナ萱プリノ小屋」である。その場所は、人々の住む「町」からは外れた場所であり、しかし完全に遠く離れてはいない場所であるといえる。この居場所を中心に、「デクノボー」は、東西南北の様々な状況に対して行動する。

「病氣ノコドモ」を「看病」し、「ツカレタ母」の「稲ノ束ヲ負」うことは、弱い者を助ける行為であり、ごく単純な善行である。それに対し、「死ニサウナ人」に「コハガラナクテモイイ」と言うことと、「ケンクワヤソシヨウ」に「ツマラナイカラヤメロ」と言うことは、単純に善行であるとはいえない。それは、怖れや苦しみを和らげようとし、争いを収めようすることではあるかもしれないが、相手に受け入れられるかどうかは不明であるし、役に立つこととは限らない。

また、「デクノボー」は、これらの人々に遭遇することで、それに関わっていくのではない。そういう「人」、そういう状況が「アレバ」、自ら「行ッテ」それを行うのである。この「デクノボー」の行動は、一貫して、一方的な行為であるといえる。

次の「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」、「サムサノナツハオロオロアルキ」という行動は、さらに「デクノボー」の「役立たなさ」がはつきりとする行動である。自分自身は、自然現象に「負ケ」ない「丈夫ナカラダ」を持つが、自然災害を抑えたり、回復したりするような力は持たない。それゆえに、個人に対する小さな善行はできても、多くの人の不幸を救うことはできないのである。

最後によりやく、周囲の人々「ミンナ」の側からの、「デクノボー」

への接触が描かれる。「デクノボー」と「呼」ぶこと、そのみが、「ミンナ」の側から「デクノボー」に対して行われる、唯一の行動である。「デクノボー」、すなわち「木偶の坊(でくのぼう)」という言葉は、一般的に「役に立たない者」、「役立たず」に対する罵倒語である。このメモでの「デクノボー」は、「コドモ」の「看病」や「ツカレタ母」の手伝いをしているが、それでもなお、周囲からは「役立たず」と評価されている。

「ミンナ」が常に同じように評価するということは、むしろ、何をしても、その行動を評価されないということである。そのことが、最後の「ホメラレモセズ」「クニモサレズ」という言葉に表れている。ただ「デクノボー」とだけ「呼」び、「ホメ」もせず「ク」にもしないことは、その対象を、何をしても肯定も否定もされない、評価対象の外側にいる者だと規定することである。

ここまで見てきたことから、あらためて「デクノボー」像について考察したい。まず、「デクノボー」は血縁関係を持たない。親も兄弟も親類もないのである。所与のものである「丈夫ナカラダ」を持った状態で、いつの間にかそこに「居」る者として描かれている。また、誰にも教わらずに「アラユルコトヲ」理解しており、「師」と呼べる存在もない。「デクノボー」の「生」において、「人」から生まれ、「人」に育まれて育つという過程は描かれない。それが省略されているのだけなのか、初めから「ない」のかは不明であるが、少なくとも本文の中では、「デクノボー」は、ただ単独で存在しているのである。

そして、「デクノボー」は、自分を生かすため、自分のために何かをする、ということがない。「人」と関わっていないときは、ただ

「萱ブキノ小屋ニ牛」るだけである。「食べる」ことに関する記述はあるが、その「食べもの」を得る方法は記されていない。また、動物性のものを含まない食事の内容も、むしろ、自分を生かすために、他の動物の命を必要としないことを示しているものといえる。

「デクノボー」は、農民の姿であると言われることも多いが、実際は自分で農業をしているという記述はない。少なくとも、「サウイフモノ」であることの要素に、それは含まれていないといえる。生業を持たず、狩りも採集もしない「デクノボー」は、もともと持っている「丈夫ナカラダ」だけで、何もせずに生きることができるようである。

さらに、「デクノボー」は、自分から他人へ関わっていくが、そのことによって他人から評価されることがない。「役立たず」という意味の「デクノボー」が唯一の評価であって、それ以外の毀譽褒貶を受けることはない。「病氣ノコドモ」の「看病」、「ツカレタ母」の手伝いという「役に立つ」はずの行為にしても、「ホメラレ」ない、賞賛されない程度の善行とみなされている。

つまり、「デクノボー」は、一方的に「人」と関わるが、そこに相互の「関係」が生まれることはないのである。係累のない「デクノボー」は、常に「ミンナ」、すなわち「人」との「関係」の外側に居る。「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ／小サナ萱ブキノ小屋」という「デクノボー」の「居」場所は、「人」との「関係」からの距離でもあるといえる。

そのことは、自分のためには何もせず生きられるということと繋がっている。自分のための行動が、利害関係において他人とぶつかったり、他人に影響を及ぼしたりすることで、そこに「人」と

「人」との「関係」が生まれるという可能性は、あらかじめ排除されている。「自分」が存在するために必要とする場所の範囲が限りなく小さければ、他の存在と繋がったり、反発したりという「関係」は生じなくなる。さらに、「人」に何らかの影響を及ぼすことがないのであれば、自分の行動に責任を負うこともなくなるのである。

このメモの中で、「人」という語が出てくるのは、「南ニ死ニサウナ人アレバ」の部分のみである。つまり、「人」とは、「デクノボー」が一方的に関わる「相手」の側なのである。ときどき「病氣」をし、日々の労働に「疲れ」、いずれ「死」に直面し、周囲の「人」との「関係」の中で時には「喧嘩や訴訟」を起こすこと、それこそが「人の営み」である。「デクノボー」は、その「人の営み」に、常に外側から関わる者として描かれている。

そうであれば、「デクノボー」とは、「人」ではなく、「サファイフモノ」としか呼べない架空の存在であると考えるのが妥当と思われる。「デクノボー」は、そう「ナル」ものではなく、初めからそうで「アル」ものなのである。すなわちこれは、「人」が「人」として目指すべき「理想の人間像」というようなものではないといえる。

中野新治は、「デクノボー」が持つ「丈夫ナカラダ」について、「他者の世話にならないための前提であると言うこともできる」とし、「食べもの」については「それ以上のものは他者との交渉なしには入手できないではないか」として、「ここには共生の下限ともいえるべき生のありようが描かれている。」「東ニ病氣ノコドモアレバ」以下の行為は、その下限をкаろうじてかすめているのであって、これ以上進めば、人は人間としての生を放棄することになるのである」と述べ、「デクノボー」を「あたうる限り植物に近い生」としている。しか

し、「デクノボー」を必ずしも「人間としての生」として考えなければならぬ理由はない。むしろ、現実には不可能な「人間としての生を放棄」したうえで「理想」として、「デクノボー」という「人ならざるモノ」がいると考えられるのではない。

冒頭でも述べたとおり、「雨ニモマケズ」は作品として制作されたものではなく、病床にあつた宮沢賢治が書いたメモである。手帳に自分の「ナリタイ」モノを書きつけた際の賢治には、それが「人間」であるかどうかということは、頭になかったとも考えられる。その結果、「人」として存在するものではなく、「人」の外側に存在し、一方的に「人」に関わり、「人」からの評価を受けない「モノ」である「デクノボー」が現れた。それは空想上の生き物であり、目指すべき「理想」というより、むしろ「そのようであれたらよかったのに」という「述懐」に近いものではなかっただろうか。

冒頭で述べたとおり、「雨ニモマケズ」の「デクノボー」像は、賢治童話の主人公たちの人物像に重ねて語られることも多い。しかし、「デクノボー」と異なり、童話の主人公たちの在り方には、「人」との〈関係〉の中に存在することが描かれている。今回は「雨ニモマケズ」と近い時期に成立した童話の中から、賢治の「ありうべかりし自伝」ともいわれる「グスコブドリの伝記」のグスコブドリ、そして賢治が理想とした「デクノボー」像のひとつと指摘される「セロ弾きのゴーシュ」のゴーシュについて検討したい。

二、ブドリ

「グスコブドリの伝記」^(注5)は、主人公グスコブドリが、イーハトー

ブの森の「木樵り」の子として生まれるところから始まる。妹ネリとともに、両親に育まれて暮らすブドリは、異常気象による冷害で、その家族を失うことになる。両親は、子どもたちに食糧を残すために自ら「家」を出て「森」へ消えてゆき、妹ネリは人攫いに連れ去られてしまう。自分に繋がる〈関係〉をすべて失い、一人になったブドリは、生きるために働き始め、その中で様々な人と出会い、〈関係〉を結んでいく。

やがてブドリは、クーパー大博士とペンネンナム火山局技師という、「師」といふべき人物の指導と協力を得て、自分の人生と深く結びつく「災害」を除くための「仕事」を実現することになる。「火山局」の技師となったブドリは、「沼ばたけ」に「雨」とともに「肥料」を降らせる「仕事」を行う。自分の念願であった「旱魃」を防ぐ「仕事」を実行したブドリは、喜びに包まれるが、ペンネンナム技師は次のように告げる。

「こつちでは大分雷が鳴りだして来た。網があちこちぎれたらしい。あんまり鳴らすとあしたの新聞が悪口を云ふからもう十分ばかりでやめやう。」

ペンネンナム技師は、「仕事」の影響で「雷」が鳴ることによって、「新聞が悪口を云ふ」ことを気にしている。「雨」を降らせるブドリの「仕事」は、農業を助け、暮らしを豊かにするものであるが、たとえイーハトーブの人々のために行う「仕事」であっても、理不尽な悪評を得ることもあるということである。ここには、いわゆる「世間の評価」への意識が表れており、「新聞」はその媒体として出

てきている。

次に、その「仕事」について、ブドリが周囲の人々からの反響を得る場面を引用する。

その年の農作物の収穫は、気候のせいもありましたが、十年の間にもなかつたほど、よく出来ましたので、火山局にはあつちからもこつちからも感謝状や激励の手紙が届きました。ブドリははじめてほんたうに生きた甲斐があるやうに思いました。

「仕事」が成功し、豊作となったことで、ブドリは人々から「感謝状や激励の手紙」を受け取ることになる。ブドリは、自分の「仕事」によって人の役に立ち、人から感謝されることで、「生きた甲斐」を感じる。この「手紙」が「火山局」に届いたのは、「新聞」が「火山局」の「仕事」を報じたことによるものであろうと推測できる。

一方でブドリは、この「仕事」のせいで「オリザ（稲にあたる穀物）」が倒れたと誤解した百姓たちに憎まれ、理不尽な暴力を受けることになる。

「この野郎、きさまの電気のお蔭で、おいらのオリザ、みんな倒れてしまつたぞ。何してあんなまねしたんだ。」一人が云ひました。

ブドリはしづかに云ひました。

「倒れるなんて、きみらは春に出したポスターを見なかつたのか。」

「何この野郎。」いきなり一人がブドリの帽子を叩き落しました。

それからみんなは寄つてたかつてブドリをなぐつたりふんだりしました。ブドリはたうたう何が何だかわからなくなつて倒れてしまひました。

気がついて見るとブドリはどこか病院らしい室の白いベッドに寝てゐました。枕もとには見舞の電報や、たくさんの手紙がありました。ブドリのからだ中は痛くて熱く、動くことができませんでした。けれどもそれから一週間ばかりたちますと、もうブドリはもとの元氣になつてゐました。そして新聞で、あのときの出来事は、肥料の入れ様をまちがつて教へた農業技師が、オリザの倒れたのをみんな火山局のせいにして、ごまかしてゐたためだといふことを読んで、大きな声で一人で笑ひました。

自分の行つた「仕事」によって恨みを買うことになり、ブドリは暴行を受けて倒れてしまふ。しかしその後、彼の病室には、事件を知つた人々から「見舞の電報や、たくさんの手紙」が届けられる。これを送つたのは、ブドリの「仕事」で助けられた人たちであろう。さらに、ブドリは「新聞」によって、百姓たちの行動が誤解から生じたものであつたことを知り、彼らに対する蟻りを解消する。人の行動を評価する媒体として出てきた「新聞」は、ブドリにまつわる出来事を報じることで、ブドリと周囲の人々との〈関係〉に影響を及ぼしている。ブドリの行動が世間に評価されることによって、様々な形での人との〈関係〉が生まれる様子が描かれているのである。

また、この出来事は、生き別れになつていた妹ネリとの再会をもたらすことになる。ブドリの病室を訪ねてきたネリは、驚くブドリ

にこれまでの経緯を語る。人攫いに捨てられたネリは、牧場の主人に拾われ、そこで働くうちに、主人の息子と結婚したという。

またあの森の中へ主人の息子といつしよに何べんも行つて見たけれども、家はすっかり壊れてゐたし、ブドリはどこへ行つたかわからないのでいつもがっかりして帰つてゐたら、昨日新聞で主人がブドリのけがをしたことを読んだのでやつとこつちへ訪ねて来たといふことも云ひました。

ネリは「新聞」でブドリの消息を知り、訪ねてきたと告げる。「新聞」が、切れていたブドリとネリとの兄妹の〈関係〉を繋ぎ直すものとして働いたということである。ブドリの行動をめぐる毀誉褒貶があつてこそ、ブドリはネリと再び繋がることのできたのである。

ネリと再会したブドリは、ネリの新しい家族とも交流し、楽しい日々を暮らすことになる。その中で、ブドリの評判を聞いたらしいかつての仕事仲間の訪問を受け、「森」へ消えた両親の墓の所在を知る。そこでブドリは、あらためて「白い石灰岩の墓」を建ててそこへ通うようになる。ここでも、人からの評価と、人との関わりにより、失われていた両親との〈関係〉を回復することになるのである。最終的に、ブドリは、冷害を防ぐための火山の人工噴火の「仕事」に携わり、命を落とす。その結果を描いた結末部分を引用する。

そしてちやうど、このお話のはじまりのやうになる筈の、たくさんさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんさんのブドリやネリといつしよに、その冬を暖いたべものと、明るい薪で楽しく

暮すことができたのでした。

ブドリの最後の「仕事」は、ブドリ自身とブドリの家族に重ねられる、「イーハトーブの人たち」の「暮し」を守ることであった。それは、人との〈関係〉^(注16)の中で生きたブドリであるからこそ望んだ「仕事」であるといえる。この結末は、「自己犠牲」の文脈から、「ジブンラカンジョウニ入レズニ」^(注17)他人に尽くそうとする「デクノボー」像と重ねられることが多い。しかし、人と関わることによって自分自身を形成していき、毀誉褒貶を受けることで周囲との〈関係〉を築いて自分の「居場所」を得、その延長として、自分自身の「家族」になぞらえられる人々を救う最後の「仕事」を行ったブドリのあり方は、「ホメラレモセズ／クニモサレズ」、人からの評価と〈関係〉を持たない「デクノボー」からは遠く隔たつているといえる。

三、ゴーシュ

先述したように、「ゼロ弾きのゴーシュ」^(注18)の主人公ゴーシュは、「デクノボー」的人物とされることの多い人物である。中村文昭は、「銀河鉄道の夜」のジョバンニ、「ボラーノの広場」のキューストという理想を持った主人公たちと対置して、「賢治はゴーシュ、虔十、ペゴ石のような生を、達しえない自分の彼方にえがいた。」^(中略)もうひとつの理想として、かれは愛すべき主人公を生んだのである」と述べている。また、桑原幹夫は、「ゴーシュはフランス語で、歪んだ、不調法な、無器用な、という意味の語にあたる。(中略) ゴーシュはその名からしてデクノボウそのものをあらわしているのである」とし、

ゴーシュを、「賢治の目指したテクノボウの幸福の理想」であり、「自己の願望をうつして遂にたどりつかなかった、理想の姿の一つであった」^(註26)としている。

しかし、ゴーシュは、少なくとも「雨ニモマケズ」に表れている「テクノボー」とは、全く異なる性質を持つ人物として描かれている。作品冒頭の語り手によるゴーシュの紹介、および音楽会の練習の場面での「楽長」からゴーシュへの言葉を引用する。

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないとはいふ評判でした。上手でないところではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいちめられるのですた。

「(前略) おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情といふものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもびたつと外の楽器と合はないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくやうなんだ、困るよ、しつかりしてくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるやうなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。」

(後略)

ゴーシュは「仲間の楽手のなかではいちばん下手」なセロ弾きとして登場する。その「下手」である所以は、「楽長」の言葉によれば「怒るも喜ぶも感情といふものがさっぱり出ない」こと、「どうして

もびたつと外の楽器と合はない」ことにある。つまり冒頭でゴーシュは、「感情を表出すること」「周囲と合わせること」に問題を抱えているのである。

「感情」を表現し、それを相手に伝えること、そして周囲と協調することは、どちらもコミュニケーションの問題であるといえる。さらにゴーシュは、「いちばん下手」であるがゆえに「楽長にいちめられ」ており、楽団の中でも孤立している。「セロ弾き」としてのゴーシュが抱える問題点は、ゴーシュの人間関係の問題に直結しているのである。

この後、ゴーシュは、セロの練習中に夜な夜な訪れる動物たちとの喜怒哀楽に満ちた交流を経験することになる。セロを通して動物たちと触れ合う中で、ゴーシュは、相手と向き合い、理解し合うコミュニケーションを経験していく。その後の音楽会で、楽団の演奏は成功を取めるが、それはゴーシュが周囲の演奏に「合わせる」ことができたということの意味している。このことには、ゴーシュのコミュニケーション能力の向上が大きく関係していると考えられる。^(註27)楽団の「第六交響曲」の成功後、「楽長」からアンコールに指名されたゴーシュは、みんなが自分を「ばかに」しているのだと考え、その怒りを演奏にぶつける。鬼気迫る勢いで弾いた「印度の虎狩」は、思いがけず周囲からの大絶賛を得ることになる。

ところが楽長は立って云ひました。

「ゴーシュ君、よかったぞお。あんな曲だけれどもこゝではみんなかなり本気になって聞いてたぞ。一週間か十日の間にずぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。

やらうと思へばいつでもやれたんじゃないか、君。」仲間もみんな立って来て「よかったぜ」とゴーシュに云ひました。

「楽長」に「表情といふことがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情といふものがさっぱり出ないんだ」と注意され、また「仲間の手のなかではいちばん下手」であるために、周囲から孤立していたゴーシュは、「怒り」という感情を見事に表現した演奏によって、周囲に認められることになったのである。つまりゴーシュは、感情の表出ができない状態を克服したのであって、その姿は、「決シテ瞋ラズ／イツモシツカニワラツテキル」感情の動きを持たない「デクノボー」とは一致しない。

冒頭では、「楽長」から「光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるやうなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな」と言われ、その「下手」さを「クニサレ」ていたゴーシュが、結末では、その演奏を「ホメラレ」るようになる。そのことによって、ゴーシュは、楽団の中に、「いちばん下手」であった時とは異なる居場所を得ることとなる。また、周囲との〈関係〉も、それまでとは異なるものとなることが暗示されているのである。コミュニケーションの問題を解消し、人々の〈関係〉の中へ迎ええられるゴーシュのこの変化は、むしろ「デクノボー」的なものから遠ざかるものであるといえる。

また、ゴーシュが「デクノボー」と重ねられる要因の一つに、ゴーシュが住む「町はずれの川ばたにあるこはれた水車小屋」が、「デクノボー」が「居」る「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ／小サナ萱ブキノ小屋」と重なることが挙げられる。しかし、「デクノボー」がこの「小屋」

を起点に、自ら「行ッテ」他人と関わるのに対して、ゴーシュは四夜に渡る動物たちとの交流において、「水車小屋」から出ることはない。常に相手に「来られる」立場として描かれているのである。

ゴーシュは、「水車小屋」を訪ねてくる動物たちを、初めは拒絶し、追い返そうとしていたものの、やがて素直に迎え入れるようになる。最終的には、病気の「子ねずみ」を、自分の相棒ともいえる「孔のあいたセロ」の中にまで入れ、そのままセロを弾いて病気を癒してやるのである。この過程は、ゴーシュが心を開き、自らの内側に相手を受け入れ、親和的な〈関係〉を結んでいく過程である。そのありようは、自ら「行ッテ」外側から一方的に他人と関わる「デクノボー」とは、ほとんど逆と云っていいであろう。物語を通して描かれるゴーシュの人物像は、「デクノボー」とは決して重ならないのである。

おわりに

ここまで見てきたように、「グスコブドリ」の伝記」では、冒頭で人との〈関係〉を失った主人公ブドリが、「仕事」を通して人と関わることで、結末では、周囲との〈関係〉の中で生きる存在となることが描かれている。さらに、「セロ弾きのゴーシュ」では、演奏で感情を表すことができず、周囲とのコミュニケーションに障害を抱えた主人公ゴーシュが、動物たちとの交流でコミュニケーション能力を身に付け、感情を表出することができるようになることで、周囲との〈関係〉を改善することが描かれている。それらは、「雨二モマケズ」で描かれる「デクノボー」像とは、むしろ逆の性質をもつ

ものといえる。

当初は周囲との〈関係〉に問題を抱えていた、もしくは〈関係〉を失った主人公が、結束では、周囲との〈関係〉の中で生きる存在として描かれているという点で、「グスコープドリの伝記」と「セロ弾きのゴーシュ」は共通している。さらに、代表作「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニにも、同様の要素が表れている。^(注23)宮沢賢治が、あくまでも「人間」として、人と人との〈関係〉の中で生きる「人間像」として追求した「理想」は、こうした童話の中にこそ表れているのではないかと考えられる。

「〔雨ニモマケズ〕」の「デクノボー」像を、宮沢賢治の「理想の人間像」として、童話の主人公たちと重ねることは、かえって賢治の「理想」を見失うことになるのではないか。「デクノボー」とは、メモの中に残された、人との〈関係〉の外側に存在する、空想された「人ならざるモノ」である。そう考えることで、晩年に至るまで童話の中で描き続けられた、人との〈関係〉の中に自分の居場所を得ようとする主人公たちの人物像との間に、明確な断絶があることが浮かび上がってくるといえるのである。

注

- (1) 手帳の使用時期の推定については、『新校本宮澤賢治全集 第十三巻 (上) 覚書・手帳 校異篇』(平成九(一九九七)年七月 筑摩書房)に拠る。

- (2) 「〔雨ニモマケズ〕」の日付を含め、この手帳のアラビア数字による日付の文字は、メモの本文とは異なり青鉛筆にて記されている。その

ため、メモ本文と同時に書かれたものではなく、後日の書き込みであると推測される。

- (3) 谷川徹三「今日の心がまえ」(昭和十九(一九四四)年九月二十日東京女子大学における講演 ※『宮澤賢治』(昭和二十六(一九五一)年六月 要書房)に収録)

- (4) 中村稔『定本宮澤賢治』(昭和三十八(一九六三)年十二月 七曜社)

- (5) 「雨ニモマケズ」論争の流れについては、統橋達雄が「宮沢賢治研究史 受容と評価の変遷(2)」(統橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成別巻Ⅱ』平成四(一九九二)年二月 日本図書センター)にまとめている。統橋はこの論争について「収穫らしい収穫のなかった、論争とも言えないような論争とささやかれたこともあった」一方、「両者の問題提起とそれをめぐる周囲の発言は、けっして無意味ではなかった」と述べ、様々な論者による人生論・詩人・文学研究・宗教等それぞれの立場からの発言により「いろいろな問題が明らかになっているように思われる」点を評価している。

- (6) 『新校本宮澤賢治全集』(※注1参照)では、この手帳について「文学作品の下書等のほかの大半は經典の語句(「兄妹像手帳」を除けば、これが記入されているのは本手帳のみである・信仰上の悲願・反省等で占められている」と指摘されている。なお、「〔雨ニモマケズ〕」メモは手帳の第五一頁から第五九頁に渡って記されているが、次の第六〇頁には「南無妙法蓮華經」の文字を中心とした法華經の「十界曼荼羅」の一部が書写されており、この頁を「〔雨ニモマケズ〕」の一部と考える見方もある。賢治は国柱会から授与された「十界曼荼羅」の写本を本尊として所持していた。西田良子は「〔雨ニモマケズ〕」は人に読んでもらうために書いたものではなく、自省自戒の気持を

こめた書いた、私的な言葉であるから、「雨ニモマケズ」の書かれている頁だけでなく、その前後の頁も視野に入れて理解すべきである」と述べ、昭和六年当時の賢治の生活上、健康上の事情とそれに伴う心境の変化等の背景とともに、法華経信仰、特に国柱会との関わりに注目して論じている(「雨ニモマケズ」考)『宮沢賢治読者論』平成二十二(二〇一〇)年三月 翰林書房。

- (7) 構大树『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けたのか』(令和元(二〇一九)年九月 大修館書店)

- (8) 中地文「教育面における「賢治像」の形成」(『修羅はよみがえった』宮沢賢治没後七十年の展開)平成十九(二〇〇七)年九月 宮沢賢治記念会)

- (9) 葛西まり子「伝記教材の中の宮沢賢治」(『国文学 解釈と教材の研究』第五十三巻十三号 平成二十(二〇〇八)年九月 学燈社)

- (10) ロジャー・バルバース著 上杉隼人訳『英語で読み解く賢治の世界』(平成二十(二〇〇八)年六月 岩波ジュニア文庫)

- (11) 宮沢賢治文 アーサー・ビナード英訳 山村浩二絵『雨ニモマケズ Rain Won't』(平成二十五(二〇一三)年十一月 今人舎)

- (12) YouTube [mpj] 松香フォニックス公式チャンネル「【宮沢賢治】雨ニモマケズ (Arare ni mo Makezu) 英語版—I will not give in to the rain」(平成二十六(二〇一四)年三月公開 株式会社 mji 松香フォニックス) <https://www.youtube.com/watch?v=AieSdKpawG4> (令和五(二〇二三)年十月十二日最終アクセス)

なお、株式会社 mji には、「セロ弾きのゴーシュ」の英語教材によって、平成十七(二〇〇五)年に宮沢賢治学会より「イーハトーブ賞奨励賞」が贈られている。

- (13) 二十四行目「ヒドリ」については、「ヒデリ」の誤記であるとする説

を採る。なお、この「ヒドリ」を「ヒデリ」の誤記と見るか、そのまま「ヒドリ」と読むかのいわゆる「ヒドリーヒデリ論争」については、入沢康夫が、「グスコープドリの伝記」の先駆稿である「グスコンプドリの伝記」中で、農業における「つらい」として「夏の寒さ」と「ひでり」が並んで挙げられていること、「グスコープドリの伝記」が雑誌(※注15参照)に発表された際、「ひでり」が「ひどり」となっている箇所があること、詩「毘沙門天の宝庫」の原稿で「旱魃」に「ひでり」とルビを振る際、最初に「ひど」と書いて訂正した痕跡があることなどを述べて「ヒデリ」誤記説を裏付けており(「ヒドリ」か、「ヒデリ」か 宮沢賢治「雨ニモマケズ」中の一語をめぐって)平成二十二(二〇一〇)年五月 書肆山田、説得力がある。

- (14) 中野新治「『雨ニモマケズ』論——樹木的生への到達——」(『日本文学研究』二十九号 平成五(一九九三)年十一月 梅光学院大学日本文学会)

- (15) 「グスコープドリの伝記」は昭和七(一九三二)年三月(『児童文学』第二冊)に発表された。本作品の成立過程としては、まず大正十(一九二一)年から十一(一九二二)年頃に執筆されたと推測される「ベンネンネンネンネン・ネネムの伝記」草稿があり、そこから大幅な改稿を経て、昭和六(一九三二)年頃に先駆稿「グスコンプドリの伝記」が成立、さらに雑誌発表にあたって手を加えられた。

- (16) ブドリにとっての「仕事」の意味と、周囲の人々との(関係)の変化については、拙稿「グスコープドリの伝記」の結末を読む(『福岡大学日本語日本文学』二十五号 平成二十七(二〇一五)年一月

福岡大学日本語日本文学会)にて詳しく述べている。

(17) 注9参照。

(18) 「セロ弾きのゴーシュ」は生前未発表の童話。原型は「セロ弾きのはなし」と題された童話であったと推測されるが、使用された用紙の構成が複雑であり、幾次にも渡る書き直しやエピソードの入れ替え等が行われたと考えられる。最終的な成立時期は昭和六(一九三二)から八(一九三三)年頃と推測され、賢治の最後の童話ともされる。

中村文昭『「セロ弾きのゴーシュ」』(『宮沢賢治』昭和四十八(一九七三)年七月 冬樹社)

(19) 桑原幹夫『「セロ弾きのゴーシュ」論——宮沢賢治と音楽の関係——』(武蔵野女子大学紀要)十八号 昭和五十八(一九八三)年三月 武蔵野女子大学文化学会

(20) 動物たちとの交流を通じたゴーシュのコミュニケーションにおける問題の克服については、拙稿「宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』論——〈関係〉の問題から——」(福岡大学日本語日本文学)十二号 平成十四(二〇〇二)年一月 福岡大学日本語日本文学会

(21) 治『セロ弾きのゴーシュ』論——〈関係〉の問題から(二)——」(福岡大学日本語日本文学)十三号 平成十五(二〇〇三)年一月 福岡大学日本語日本文学会)にて詳しく論じている。

(22) 「雨ニモマケズ」メモでは、五六頁(コハガラナクテモイ、トイヒ)と書かれた部分の上)に赤鉛筆で「行ッテ」の書き込みがある。田中成行はこの点に注目し、賢治の弟宮沢清六氏の孫である宮澤和樹氏が「著書や講演の折々に「行ッテ」の大切さを伝えておられる」ことを挙げ、結核から回復しつつあった賢治が「北」に「行ッテ」が抜けていることに気づき、「自ら「行ッテ」自ら行動す

る賢治自身のあるべき姿を完成させるために推敲した表現である」と述べている(『宮沢賢治「雨ニモマケズ」の教材としての本文決定の意義——井伏鱒二『黒い雨』の「雨ニモマケズ」の引用に注目しつつ——』(岩手大学教育学部研究年報)第七十六巻 平成二十九(二〇一七)年三月 岩手大学教育学部。この書き込みが「北」の部分に「行ッテ」を付け加えるためのものであったかは断定できないが、書き込みをした賢治が「行ッテ」という表現にある程度のこだわりを持っていたことは推測できるといえる。そのことから、「デクノボー」像において、自ら「行ッテ」他人と関わる、という要素は意味を持つと考えられる。

(23) 「銀河鉄道の夜(最終形)」では、冒頭において同級生たちから疎外され、周囲から孤立した境遇にある主人公ジョバンニが、ただ一人の親友カムパネルラとの銀河鉄道の旅を経て、結末においてカムパネルラを失う代わりに、周囲との〈関係〉を取り戻すことが示唆されている。「銀河鉄道の夜」における〈関係〉の問題に関しては、いずれ稿を改めて論じたい。

※本文引用は、すべて『新』校本『宮沢賢治全集』(筑摩書房)に拠る。